
「珠玉の名画と旧制松本高等学校」

信州大学人文学部准教授

金井 直

信州大学附属図書館には、旧制松本高等学校旧蔵の絵画が 19 点収められている。そのほとんどが 1920 年頃の作であることからすると、同校(創立 1919 年)の新校舎落成(1922 年)等を機会に実現したコレクションではないだろうか。じっさい個々の作品もそれに相応しい良質のもので、当時の洋画壇を代表する画家の秀作選となっている。

藤島武二(1867-1943)は、パリ留学から戻った黒田清輝(1866-1924)と親交を結び、白馬会の結成、東京美術学校西洋画科の開設(ともに 1896 年)に関わった洋画界の重鎮である。1905 年から約 4 年間、ヨーロッパに滞在し、後期印象主義に接すると同時に古画に親しみ、黒田あるいは黒田の師であったラファエル・コランの明徴繊細な画風=外光派、「紫派」の枠を越えた粘りのある筆致を獲得した。《ローマの風景》(図版 87)はこの滞欧期の作品であり、簡略化された、しかし有機性を失わない藤島様式の特徴がはやくも現れている。

藤島同様、岡田三郎助(1869-1939)も白馬会結成に参加し、東京美術学校西洋画科に助教授として着任した画家である。1897 年に渡仏し、コランに直接学んでいる。師の繊細な色彩と筆致をよく吸収し、1902 に帰国した後も、多くの婦人像にその華やかな様式美を示した。《信濃の春》(図版 88)は、後年、スケッチ旅行で各地を訪れていた時期の作品で、何気ない農村の風景を描きつつも、柔らかな春の到来そのものを主題化し得る、岡田の着想と技量の卓越がよく示されている。

藤島、岡田が教師として東京美術学校を支えたのに対し、中沢弘光(1874-1964)は、西洋画科第一期生として、黒田に学んだ画家である。1907 年の第一回文展に出品し、1910 年からは同展審査員を務めた。《伊豆山の風景》(図版 89)は光風会結成後の作品であるが、中間色を基調とした海景描写には、黒田の風景画を彷彿とさせるものがある。

以上の 3 人のほかにも、松本高校絵画コレクションには、東京美術学校の教師・卒業生たち、あるいは白馬会系の作家の作品が、以下の通り、数多く含まれている。

長原 孝太郎 《花瓶と花》

白滝 幾乃助 《バラ》

小林 万吾 《山辺》

和田 英作 《スイトピー》(1920 年)

矢崎 千代二 《印度教徒の沐浴場》

高木 背水 《五月雨の朝》

矢崎 千代二 《印度の村落 カルカッタ郊外》

石井 柏亭 《鞆の津》

藤岡 亀三郎 《登山口四ツ家》(1923年)

南 薫造 《雨》

辻 永 《風景》

田辺 至 《秋色》(1920年)

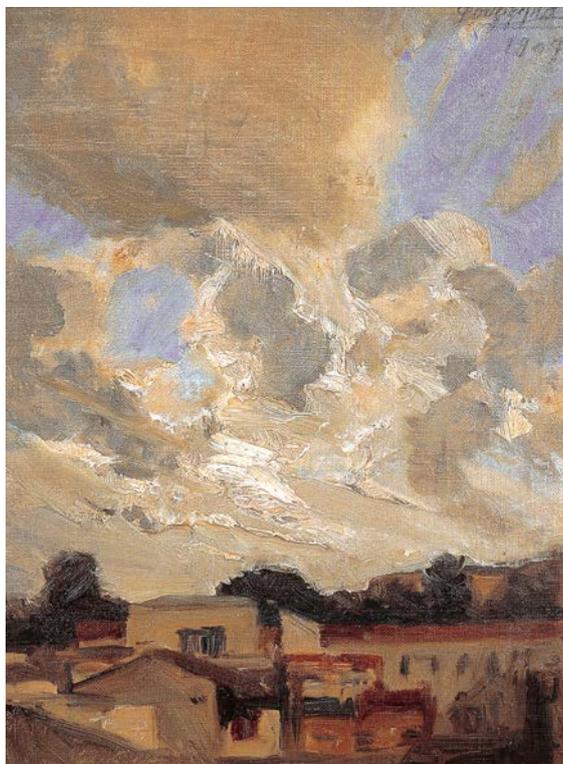
清水 良雄 《湖畔》(1920年)

いずれも日本洋画のアカデミズムないし「官」の側面を支えた錚々たる顔ぶれである。その一方で、同コレクションには、満谷国四郎(1874-1936)、石川寅治(1875-1964)、柚木久太(1885-1970)ら、太平洋画会のメンバーとして大正・昭和の画壇を牽引した在野の実力者たちの作品も含まれている。満谷と石川はともに小山正太郎に学び、明治美術会に参加した画家である。小山は1876年に開校した工部美術学校において、絵画教師アントニオ・フォンタネージから濃密な自然主義を学んでおり、この流れをひいて、満谷、石川も、当初は油彩の質感を活かす重厚な画風で、歴史画、風俗画、人物画などをてがけた。しかし、黒田の帰国後、外光派＝「紫派」のスタイルが東京美術学校、白馬会から広がってくると、満谷、石川は太平洋画会の結成に加わり(1902年)、「脂派」と称された明治美術会風の作風と「紫派」の対立を相対化する新しい表現を試みた。石川は1902-04年にかけて欧米を旅行。満谷は1911-13年、滞欧し、J・P・ローランスの教室に通うが、しだいに後期印象主義やキュビズムの影響を受け、作風を一新する。《晩秋、野尻湖畔》(図版90)にはゴーギャンやポンタヴェン派に通じる装飾性と象徴主義の混交が看取され、写実の枠を越える主観的な美学に対する満谷の関心がうかがえる。いっぽう石川の《春雨の潮来》(図版91)は俯瞰構図のなかを鮮やかな色彩が軽妙に揺れうごく佳品である。湿潤な空気への関心は東洋の絵画の伝統に通じるが、筆致を支えるのはむしろエコール・ド・パリ風の洒脱さである。

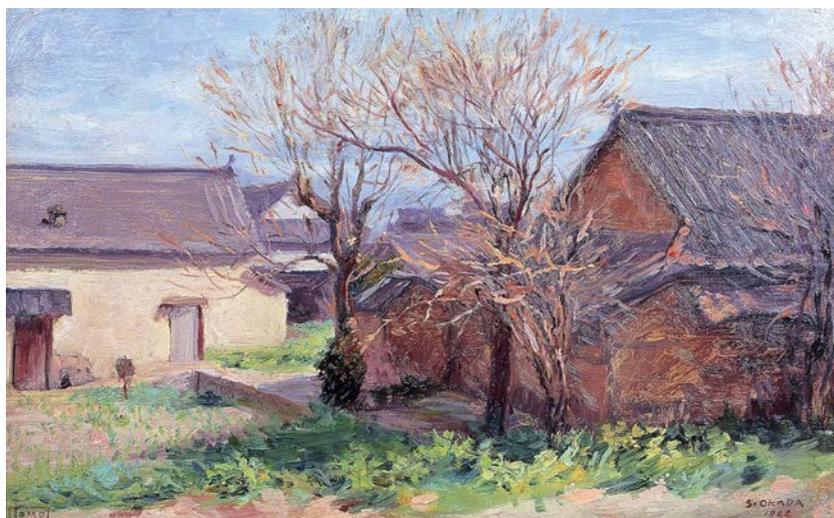
満谷、石川よりおよそ10歳若い柚木久太は、太平洋画研究所において満谷らに学んだ後、1911年、渡欧。ローランスに師事し、1915年に帰国する。1916年、第10回文展で特選を受賞。1919年、22年の帝展でも特選を得ている。《雪の諏訪湖の景》(図版92)はこの頃の作品で、写生を旨としながらも、マチエールの実験を試みる柚木の造形と意志の確かさがうかがえる。

以上のように、旧制松本高等学校絵画コレクションは、外光派、「紫派」の流れをくむ東京美術学校系の画家たちの作品を中心に、工部美術学校・明治美術会の衣鉢をつぎつつも、「脂派」から脱し、新様式を求めた画家たちの作品も加えて、日本近代洋画史の一局面をコンパクトにまとめたものである。こうした良質のコレクションは、信州大学の貴重な財産として、いまなお私たちの目を楽しませてやまないものであるし、また、歴史的に見ても、同コレクションが松本高校において可能となったこと自体、近代日本における洋画受容の成熟ぶりをうかがわせる事例と言えるだろう。今後、19点の保存・研究・展示活動の、さらなる充実を期待したい。

学府に眠る珠玉の名画



87 藤島 武二 (1867-1943)
ローマの風景 1907年 油彩、カンヴァスボード 35×25.5cm



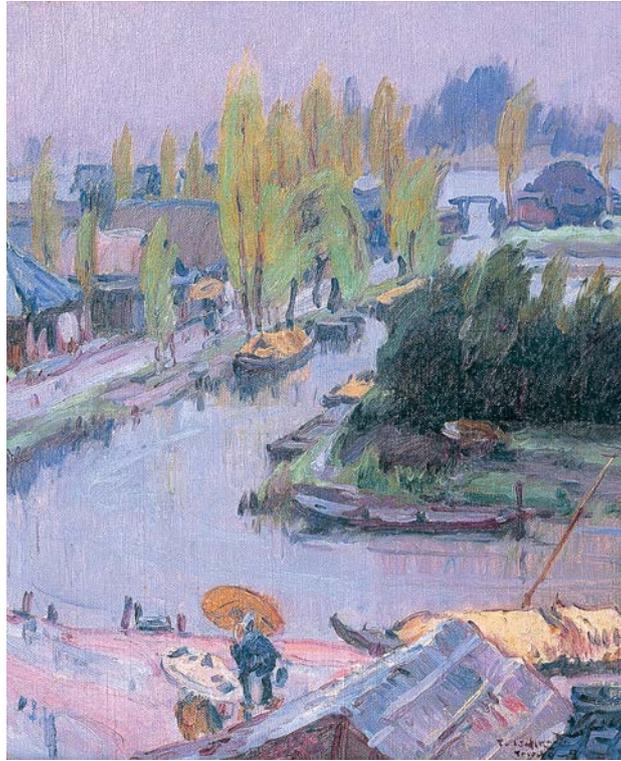
88 岡田 三郎助 (1869-1939)
信濃の春 1922年 油彩、カンヴァス 33.5×53.0cm



89 中沢 弘光 (1874-1964)
伊豆山の風景 1921年 油彩、カンヴァス 33.4×45.4cm



90 満谷 国四郎 (1874-1936)
晩秋、野尻湖畔 1923年 油彩、カンヴァス 51.5×64.5cm



91 石川寅治（1875—1964）
春雨の潮来 1920年 油彩、カンヴァス 45×37cm

貴重な地理学的資料を含む小谷コレクションにちなみ、本展絵画部門では、小谷隆一氏の母校、松本高等学校旧蔵絵画コレクション中の風景画6点を展覧する。明治後期にローマで描かれた藤島武二の作品以外は、すべて1920年代初めに日本国内で描かれたもので、「信濃の春」、「伊豆山の風景」、「晩秋、野尻湖畔」、「春雨の潮来」、「雪の諏訪湖の景」と、四季折々の様々な地域の風景が並ぶ。

「風景」という言葉そのものは明治以前から繰り返し用いられてきたが、日本人画家の作題として「風景」が登場したのは、1895年の明治美術会展においてである。これは志賀重昂の『日本風景論』（1894年）がベストセラーとなる時期であり、また、近代登山の黎明期でもあった。もっとも、呼称の誕生に先立って、名所旧跡とは異なる無名の自然景を、小山正太郎たちは1880年頃から盛んに描き出していた。文学において同様の無名の「風景」が登場するのは明治20年代末のことである。外界を諸関心から切り離して、対象化し、さらにはそこに自らの内面を投影する「風景」ないし「風景との対話」の成立である。それから四半世紀を経て、上の5作品は登場する。「風景」はごく一般的なものとなっている。あるいはより制度的な分類管理の対象となっているかもしれない（例えば、国立公園の設置準備が進むのは1920年代であり、国立公園法の制定は1931年である）。とはいえ、それでもなお、山に憧れ、松本に集い学んだ感受性豊かな若者たちにとって、これらの絵画は風景、自然、世界への強い誘いとなっていたのではないだろうか。そうした想像へと私たちを導き得るほどに、じっさい、これらの風景画の魅力は今日なお鮮やかなものである。

